

## 学位論文題名

## 山里と草庵の住まい観

—中古・中世の文学作品から見た—

## 学位論文内容の要旨

日本人は住居に対して無関心であるとか、住居を軽視してきたと言われる。そしてそのことが日本の住居を貧困なものにしてきた原因の一つであると言われる。しかし日本人にも住居の理想像はあった。ただそこには豪華な住居や快適な住居ばかりでなく、それとは対照的な住居も含まれていた点が注目される。即ち住居の広さや外観の立派さといった視点とは別の視点から評価される理想的住居というものがあったのである。本論文でとりあげた山里と草庵はそのような住居で、それぞれ寂しく辺鄙な場所にある住居であったり、小さく粗末な仮小屋のような住居でしかなかったが、中古、中世の文学作品の中では理想的な住居とされていたものである。では、それらはどのような魅力ある住居であったか。本論文はそのこと—山里と草庵の住居観—を中古・中世の文学作品を資料としながら明らかにしようとしたものである。

論文は6章からなり、I章とVI章は序論と結論、II章は中古における山里の魅力の中古の和歌—古今集から詞華集までの勅撰和歌集中の山里の歌（歌中に山里の語が詠みこまれた歌）と屏風歌—を主な資料として考察したもの、III章は中古の物語を資料としたもの、IV章は中世の遁世者の庵の魅力をもとに説話（発心集・閑居友・撰集抄）を資料として明らかにしたもの、V章は中世の和歌—千載集から新統古今集までの勅撰和歌集中の庵の歌（歌中に庵の語が詠みこまれた歌）—を主な資料として、中世の旅人の庵・田守の庵、特に遁世者の庵の魅力を明らかにしたものである。以下ではII章とIII章、IV章とV章をまとめ、要点を記す。

## ①山 里（II章・III章）

山里とは文字通りには「都の外の辺鄙な場所」である。それ故そこは本来ならば都人（王朝人）が住むべき場所ではなかった。しかし王朝人にとって山里は極めて魅力的な場所となっていた。即ちそこは憂き世の外の世界であり、眺望や自然美（めづらしく、おもしろく、物あはれな自然美）・田園情趣などに富んだ景勝地で、都市生活の煩わしさを一掃してくれるような魅力ある場所であった。一方山里は華やかな都とは対照的な寂しい場所ではあったが、その寂しさ故に独自の美的世界となっていた。「罪なくして配所の月を見む」という言葉があるように、王朝人にとって配所にも似た山里の寂しさはむしろ好ましいものでさえあった。特に中古の多くの物語や倭絵に描かれていたように、寂しい山里で寂しさに堪えている生活は、あはれ深い情景（特に理想的な恋の情景）として憧れのまのような生活であった。また山里はその山荘の庭や建築も興味あるもので、例えば庭は由緒ありげな奥深い木立ちに覆われ、寂しげな松風の音や虫の音が聞こえてくる艶なる風情を持った庭であったし、ささやかな田舎家風の垣には花や鳥・月が配され、山里ならではの風情が楽しまれていた。一方建築（山荘）も山里ならではの興味ある造りにされており、例えば殊更簡素な造りにして、山里にひっそりと隠れ住むような風情にされたり、田舎家風の造りや奥行の浅い造りにして、鄙びたものの中に月・花などを配して見るという趣向や、居ながらにして自然の只中

にいるような風情が楽しまれていた。またそこでは自適の隠遁生活や詩歌管絃の遊び、狩、山菜採り、川魚漁なども楽しまれており、山里で孤独な侘び住まいをする友を訪うことも風流なこととされていた。一方山里は後世の安楽を願いながら心のどかな余生を送る信仰生活の場ともなっていた。つまり山里は世外の地であり、寂しさにみたまされた世界であったが、むしろそれ故に、煩わしく騒々しい都から隔離された別天地となっており、美しい自然に囲われながら様々な遊びや美、恋、隠遁生活などを楽しみ、最後は静かな信仰生活を送りながら極楽往生を願うという、王朝人にとっての理想的世界となっていたのである。

## ②草 庵（Ⅳ章・Ⅴ章）

草庵（特に遁世者の庵）もまた寂しく孤独な住みかであった。しかしそれが中世の人々にとっては理想的な住みかであった。それは先ず草庵が仏法による救済の場、即ち修道生活の場だったからである。特に、多くの草庵は人も通はぬ山中に結ばれており、そのため寂しい住みかとなっていたが、寂しい場所であったが故に世の憂き目見ぬ住みかとなり、心を乱すものがない、心静かな修道生活に専念できる場所（即ち心すむ場所）となっていた。またその寂しげな自然や自然の移ろい易すさも、人の心を鎮め（心をすませ）、この世の無常やはかなさを悟らせるよすがとなっていた。一方草庵の建物は極めて簡易で粗末なものであったが、無常の世にあっては粗末な庵こそ心安らかな住みかであると考えられていたし、また庵の粗末さは無所有・無一物という清貧の境涯の象徴として、また隠徳という名聞への無欲・無執ぶりの現われとしても評価されていた。また荒れ果てた庵は欣求浄土・厭離穢土の心の現われともされており、特に住み捨てられた庵も、一所不住という無常の世（さだめなき世）にふさわしい生き方として、あるいは遁世者の心の自由さ・とらわれのなさの象徴として評価され憧憬されていた。

一方それは単に仏道修行のためだけでなく、自然美や閑寂・文芸など様々な風雅に心を慰める場所ともなっていた。即ちそこには世捨て人の身でありながら尚も心惹かれる美しい自然があり、それを友とする慰め、静寂極まる閑寂な味わい、沁みとおるような寂寥美、あるいは読書、管絃の楽しみ、友との静かな語り、花を植え、豆をまく楽しみ等々、寂しい草庵ならではの様々な風雅な味わいがあった。つまり草庵は信仰と風雅を併せ持つ住みかであり、その点でもそれは中世の人々の理想的住みかとなっていたと言えるであろう。

以上、中古・中世の人々にとって山里と草庵は共に世俗の外の住みかであることによって都の喧騒や世俗の名利とは関わりのない脱俗的な世界となっており、世俗の濁りに染まらない清らかな自然の中で心をすませ信仰生活の場所として、あるいは寂しさ故にあはれ深さの増す様々な美や情趣を楽しむ風雅な場所として、極めて魅力的な世界であったことを指摘した。即ち、脱俗・孤独・自然・信仰・風雅が山里と草庵に共通する要素であり、それらによって山里と草庵は中古・中世の人々の理想的住居（少なくとも文学作品の中に投影された彼等の理想的住居）となっていたことを指摘した。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 越 野 武  
副 査 教 授 足 達 富士夫  
副 査 教 授 上 田 陽 三

学 位 論 文 題 名

## 山里と草庵の住まい観

— 中古・中世の文学作品から見た —

本論文は、中古（平安時代）の山里と中世の草庵に対する日本人の住まい観を明らかにしたもので、具体的にはそれらがどのような魅力ある住まいと考えられていたかを、当時の和歌、物語などの文学作品を資料として詳らかにしている。

論文は6章からなる。Ⅰ章とⅥ章は序論と結論、Ⅱ章は中古における山里の魅力の中古の和歌（古今集から詞華集までの勅撰和歌集中の山里の歌）を主な資料として考察したもの、Ⅲ章は同じ主題に対して源氏物語その他の中古の物語文学を資料としたもの、Ⅳ章は中世の遁世者の庵の魅力をもとに説話を資料として明らかにしたもの、Ⅴ章は中世の和歌（千載集から新続古今集までの勅撰和歌集中の庵の歌）を主な資料として、中世の旅人の庵、田守の庵、特に遁世者の庵の魅力をもとに明らかにしたものである。以下、その主要な点を要約すると次のようになるであろう。

山里について（Ⅱ、Ⅲ章）

山里とは「都の外の辺鄙な場所」である。そこは本来ならば都の貴族が住むべき場所ではなかったが、反面彼らにとってきわめて魅力的な場所ともなっていた。そこはまず都市生活の煩わしさを一掃してくれるような、眺望、自然美、田園情趣などに富んだ景勝の地としてとらえられた。すなわち平安時代の貴族にとって寂しい山里は、あはれ深い世界、特に理想的な恋の情趣の漂う美的世界として、憧れのまとなっていたのである。また山里は、その山荘の庭や建築も情趣あるもので、美しい自然の中でひっそりとした閑寂な趣や恋の情趣、鄙びた田園風景とその風情を楽しむことのできるような造りにされていた。山里は詞歌管弦の遊びや狩り、山菜採りといったさまざまな遊びを楽しむ場所であるとともに、自適の隠遁生活や、心のどかな修道生活の場所ともなっていた。要するに、山里は世外の地であり、寂しさ故に、煩わしく騒々しい都から隔離された別天地となっており、風雅を楽しみ、静かな信仰生活を送りながら極楽往生を願うという、平安時代の貴族の理想的世界となっていたことを読みとることができる。

草庵について（Ⅳ、Ⅴ章）

草庵、特に遁世者の庵もまた寂しく孤独な住みかであり、やはり中世の人びとにとってはきわめて魅力的な住みかとなっていた。すなわち多くの草庵は寂しい山中に結ばれていたが、そのためそれは世の憂き目見ぬ住みかとなり、心を乱すものがない、心すむ住みかとなっていた。またその寂しげな自然や自然の移ろい易さも、人の心を鎮め、この世の無常やはかなさを悟らせるよすがとなっていた。一方、草庵の建物はきわめて簡易で粗末なものとして描かれていたが、それも無常の世にあってはむしろ心安らかな住みかとして評価されていたし、また清貧の象徴として、あるいは隠徳の象徴としても評価されていた。例えば、荒れ果てた庵、就中住み捨てられた庵は、無常の世に相応しい信仰心、自由で囚われのない生き方の現れとして評価され、憧憬されていたのである。一方、中世遁世者の庵は単に仏道修行のためばかりでなく、さまざまな風雅に心を慰める場所、心ひかれる美しい自然があり、しみとおるような寂寥美、読書、管弦、友との静かな語り、築庭など、寂しい草庵ならではの楽しみと慰めを得られる場所となっていた。

中古、中世を通じて、山里と草庵は、ともに脱俗、孤独、自然、信仰、風雅を併せ持つ住みかであり、それらがこの時代の日本人が住まいを評価する上での基本的な基準となっていたことが明らかにされた。普衍して言えば、山里と草庵は、しばしば住まいに対して無関心であると言われる日本人が例外的に高く評価した住まいであり、歴史的にはこのあと近世の草庵風茶室にとっての理想的な世界となったものであることが確認されるのである。これを要するに、本論文は古代後期および中世における山里と草庵のもつ魅力の剔出を通じて、日本人の歴史的住まい観の一端を明らかにしたものであり、日本建築史学、建築論に対して寄与するところ大である。よって、著者は北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格あるものと認める。